



東京新橋ロータリークラブ

TOKYO SHIMBASHI ROTARY CLUB

平成 25 年 10 月 4 日 ~ 5 日

東京新橋ロータリークラブ秋の旅行会 「東日本大震災被災地を訪ねて」

東京新橋ロータリークラブ
会長 内海基二

東京新橋ロータリークラブは、東日本大震災支援活動として、釜石市立唐丹（とうに）小学校に運動具、ユニフォーム、シューズなどを寄贈して以来、同小学校とは毎年交流を続けてきました。今年度は、私どもロータリアンの一人でも多くの方々が現地を自らの目で見てみよう、被災地訪問の秋の旅行会を計画しました。総勢 16 人の参加です。平成の三陸大津波の被災地、陸前高田市、釜石市、そして後方支援基地の遠野市を中心に現地を見て、お話を伺ってまいりました。伺ったお話内容は下段に掲載されております。唐丹小学校では、明るく元気な出迎えとともに、コーラスのプレゼントをもらいました。全員来て観て、本当に良かったと感激ひとしおでした。平成大津波の被害については筆舌に尽くせぬ苦勞があったと思いますが、今回の訪問で、自分の目で見て、肌で感じて、現状を知り、大変深く考えさせられました。微力ではありますが、末永く被災地の皆様との交流をつなげ、支援活動に参加できればと願っています。

訪問先の皆様からお話を伺いました。

■陸前高田市訪問（10月4日）

戸羽陸前高田市のお話し

— 奇跡の一本松を望む駐車場にて —

ご覧頂いておわかり頂ける通り、この平らな辺りは全て市街地だったところ。ここには住宅がたくさん建っていて、だいたい 2,500 ~ 2,600 軒の家が津波で流されました。リアス式とは言いつつ、このあたりは海拔 0m 地帯が山手まで続いているところですので、被害が大変大きかった地域です。今後の計画としては、少しだけ残っている建物、ここから 1km くらい向こうの辺りから山手地域まで、8m くらい嵩上げをして、コンパクトな市街地を造成し

ていく予定です。また住民はなるべく高台に住めるよう、山を削って（メインは清水建設さんに依頼）130m ある高さを 45m くらいまで削りそこに平らな地帯を作って、低海拔地帯（川の向こう側）に住んでいらした方々の住居をそのエリアに建てて頂く計画です。またここを削ると 1,000 万立米の土が出ると言われております。これは東京ドームで 10 杯分になるような量で、いろいろ方策はたてておりますが、東京ドーム 5 杯分くらいの土が余ってしまう予定です。これを処理するためには、例えば相馬市に運ぶという話も出ましたが、船で運搬すると土を運ぶだけでもだいたい 20 億円くらいかかってしまう試算のため、削る面積を減らす、嵩上げの高さを調整するなど現在対応策を検討中です。

あちらに橋がご覧頂けると存じます。山を削った土の運搬はベルトコンベアで行っております。川が流れておりますが橋は一つしかありませんのでそこを使用してしまうと交通に支障がでますので、ベルトコンベアを利用している状況です。長さは全長 3km くらいです。この設置だけでもだいたい 1 年ほどかかる計画で、あと 4, 5 か月ほどで完成予定です。ご覧頂ける積み上げられた土砂は、残土ばかりでなく津波堆積物、例えば農地にあった木片やプラスチック片、金属片などが混じり合っただけで土も含め瓦礫となっています。その処理は街の中心に何十億円かけてプラントを作り、そこで瓦礫を真水で洗い塩分を抜き、また取りきれなかったものは人の手で分別し、24 時間体制でその作業を行っております。環境省の指導によると不法投棄は絶対に許されないので、瓦礫として申告したものはそのまま埋めることはできないためこの作業によりきれいになった土はまだ農地に戻していかうとしております。

棟数で申しますと 3,000 ~ 4,000 世帯ありますので、例えば土砂を置いたり嵩上げをしますのにも、持ち主一人ひとりから承諾（許可）が必要となりますので、1 件ずつ許可を得ているところです。それだけで 2・3 年はかかってしまうため、東日本大震災復興加速化本部長である自民党大島議員や井上義久議員など

いろいろな方々に直接お願いをしているところです。しかし残念ながら国会議員の方々も国の行政の方々も法律を改正する方針ではないことから、地道にやるしかないのが現状です。これが一番のジレンマです。被災者の皆様は一日も早く復興が行われることを希望しており、市としても計画を公表しておりますが、実際には1件ずつ許可を頂くことに大変時間を要しており復興に時間がかかっているのです。特に許可を頂く際には家族ごと被災された方もいらっしや、地権者の相続人を探し、相続人の居住地によっては全国様々なところに職員が赴き許可を得ている状況です。これが復興に時間がかかっている大きな原因の一つであると言えます。

全国の皆様よりご支援を頂き、今現在1億7000万円を超える寄付を頂いております。周囲の環境につきましても順次整備をしていきたいと考えておりますが、まだ残土の問題などがあり間に合っておりません。それでも全国より沢山の方々にお越し頂いて励まして頂き、なんとか住民の皆様にも笑顔が戻りつつあります。徐々にメディアなどでも取り上げられる機会が減ってきておりますが、こうしてお越し頂きご覧頂いた実情について皆様の周囲の方々にもお話し頂ければと思います。我々としても、風化させたくないとの思いから様々な情報を発信させて頂いておりますので宜しくお願い致します。

本日は柴先生とのご縁もあり、こうして皆さまにお越し頂きましたことを重ねて感謝申し上げます。そしてこれからも陸前高田だけでなく被災地に対しまして、皆さま方のご支援を賜りますようお願い申し上げます。今日は本当にありがとうございました。



奇跡の一本松へ向う途中にて

■唐丹小学校訪問（10月4日）

西村校長先生のお話し

様々な形で本当に心温まるご支援を頂き、心から感謝申し上げます。ありがとうございます。皆様から頂いたピアノ、陸上のスパイク・ユニフォーム、遊具など頂いたものは全て日々の子供達の活動に使用させて頂いております。大きなテントなどは写真でご覧頂けます通り、陸上競技の際に使わせて頂いております。本当にありがとうございます。また、震災より3年たちますが、ご支援頂いて毎年修学旅行には行かせて頂いており、旅行の写真を一部飾らせて頂いておりますのでご覧頂けますと幸いです。

東京新橋 RC の挨拶

柴会員より

まず一昨年このプロジェクトを立ち上げてくれた小山さんよりお願い致します。

小山会員

皆様こんにちは。2年前の11月にもお邪魔させて頂いた小山です。今日は皆様の元気な顔を拜見でき、嬉しく思います。これからも明るい希望を持って毎日を過ごして頂ければと心より祈っております。皆様今日はありがとうございました。

内海会長

会長の内海です。皆様こんにちは。こうして皆様の元気な姿を見ることができ、頼もしく思います。柴先生とのご縁で唐仁小学校・中学校の皆様にかかできないかと考え、継続的な支援を考えたことから始まり、2年がたちました。当時の4年生はもう唐仁中学校の1年生になったということで去年は花巻のパレード等と一緒にされた方もいらっしやと思います。校長先生に伺ったところ、あと2年先だそうですが新校舎ができるそうですね。その頃にはここにいらっしやる皆様はもう中学生ということで、ますます頑張ってもらいたいと思います。私ども新橋 RC 会員一同、新校舎準備も含めお手伝いしていくことがないか今後ご相談の上考えていきたいと思っております。毎年お会いできることを私たちも楽しみにしておりますし、皆さんますます頑張ってもらいたいと思います。保護者も大変喜んでおります。グラウンドを歩いておわかり頂けますように、仮設校舎等で少し不自由な環境ですが、子供たちは元気に頑張っております。これも本当に皆さまのご支援のおかげです。全校生徒でお迎えしたかったところですが、スクールバスの関係で本日は5・6年生の

生徒が代表してぜひご挨拶させて頂ければと思います。自慢の合唱もぜひ後ほど聞いて頂ければ幸いです。本日は本当にどうもありがとうございました。

感謝の言葉：児童会長 6年伊藤こうせい君

新橋 RC の皆さんにはとてもお世話になりました。修学旅行費や陸上のスパイク・ユニフォーム・テントなど様々なものを戴きました。修学旅行にも楽しく行くことができましたし、陸上記録会でもいい記録を残せました。これは新橋 RC の皆様のおかげです。これからも学校生活を楽しく送っていきたいと思います。本当にありがとうございました。

生徒一同

ありがとうございました。

生徒合唱 「変わらないもの」

PTA 三島会長

本日は遠路はるばるお越し頂き本当にありがとうございます。日頃の皆様のご支援により、お陰さまで生徒はすくすくと成長しております。心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。



唐丹小学校にて

■遠野市訪問（10月5日）

本田遠野市長のお話し

—遠野市伊藤家にて—

本日はお忙しい中、被災地にお越し頂き、状況を目で見て声を聴き、体で感じて頂きましたことを心より敬意を表するとともに感謝申し上げます。お忙しい日程とのこと、お昼前にはこちらをご出発になって盛岡にたたれるとのこと、岩手ならではのわんこそばや食文化をお楽しみ頂けるようですので、平成 28 年開催予定の国体やあまちゃんブームなど、

岩手も被災地よりとして立ち上がろうということをご覧頂けると思います。しかしながら今なお 1,100 名の方が行方不明のまま、また約 37,000 名の方は 3 度目の冬を仮設住宅で迎えざるを得ない状況です。ご承知の通り東北の冬は厳しく、もうまもなく 10 月 15 日、20 日を過ぎますと氷点下の気温や雪がちらつく季節となりますので、その前の 10 月の週末は屋外イベントが続きます。仮設で厳しい冬を迎えざるを得ない 37,000 名の方もいらっしゃいますが、もちろん岩手だけでなく福島や宮城にももっと困難な方々がたくさんいらっしゃることも忘れてはならないと思っています。月命日の 11 日には、今なお警察・消防・海上保安部も一緒に集中的に捜索活動が行われております。津波被害のすさまじさは今でも我々の感じるところでありますが、復興に向けて努力している状況です。

さて本日お越し頂いている伊藤家ですが、これは江戸末期の商家です。20 人くらいの奉公人を抱えていたそうで、現在でいうところのコンビニエンスストアのような、なんでも売っているお店だったようです。末裔の方は現在神奈川にお住まいとのこと、平成 4 年頃にこの屋敷を解体・市に寄贈されたことから、遠野の中心市街地の活性化のためにこちらに移築・再構しました。この通りは、一市（ひといち）という名前で、一のつく日には市（いち）がたったのです。釜石など沿岸からは魚が、内陸からはお米や野菜が届き、ちょうど沿岸と内陸の間にある交易の町だったのでした。市の日には馬三千・人三千（或いは馬千・人千）と言われる、当時大変な賑わいのある町でした。

柳田国男先生は 1910 年にこの街の話をもとに「遠野物語」という本を出版しました。また平成 20 年・21 年にご家族でお越し下さった水木しげる先生は、この「遠野物語」を漫画にしてくださいました。新書版「遠野物語へようこそ」も差し上げたいと存じますのでご参照ください。この新書は「遠野物語」が 1910 年の発刊後 2010 年に 100 周年を迎えたので、伊藤家の再構もその一環として行い、街づくり事業として出版したものです。「遠野物語」は、遠野出身の佐々木喜善氏に出会った柳田国男先生が記した物語です。当時早稲田大学の学生だった 22 歳の佐々木氏と出会った柳田国男先生（当時農商務省役人）は、佐々木氏より遠野に伝わる様々な不思議な話を聞いて遠野を訪れ、この岩手北上の山奥にある

遠野の賑わいに興味を持ったようです。その賑わいはまさにこの地が交易の拠点であったためなのですが、佐々木喜善氏が語った物語を柳田先生が本にまとめたのでした。お帰りになりましたら本をお手に取ってこの世界を感じて頂ければと思います。なかなか長い話なので通読するのが難しいことから、赤坂先生・三浦先生にお願いをしてこの本の解説書を書き下ろして頂きました。柳田国男「遠野物語」100周年記念事業として、この本を遠野市10,000世帯に配布したのです。ちなみに当市は自主財源が少なく、国や県からの交付金に頼っており人口減少により交付税も減っております。こうした状況において全世帯にこの本を配ることについては大変悩みましたが、「遠野物語」の序文には、「願わくばこれを語りて平地人を戦慄せしめよ」という言葉があり、地方にはそれぞれの文化や大切にすべき地域資源もある、という柳田先生からのメッセージであると捉え、この事業を行うこととしました。この事業に関する批判などは市民から出ていません。逆に「遠野物語」への理解が深まったようです。当時合併した宮森村の方々もこの事業に賛同してくださり、遠野の結束にもつながったように思います。また水木しげる先生がご家族でいらしてくださり、遠野について全国に発信してくださったことも感謝しております。その他として、河童捕獲許可証もお渡ししますので、これは観光協会のアイデアですが、訪れる皆さまに楽しんで頂ければと思います。

本日は柴先生よりこういったお話の機会を頂いたわけですが、遠野もまた被災地です。3月11日に市役所本庁舎の建物は1m程度地縮みしました。幸い大きな被害は少なく、すぐに住民の安全確保など確認した後、後方支援の拠点として運動場・公園の解放を指示しました。自衛隊などの派遣を考えてのことです。津波についてもすぐ危惧しました。これは私が平成7年1月の阪神大震災後の同年4月より岩手県の消防防災課長をしていたためです。そのようなときに消防防災課長についたため、100年前の三陸津波の検証を行い、災害への対応や現地調査を行った経験がありました。津波は海岸や入り江の状況により全て違うことを確認し、それを県の防災計画に反映させたのでした。その後別の役職についた後、故郷遠野の市長に立候補しました。これは遠野の活性化、この沿岸と内陸の交流の拠点、柳田先生にも評価して頂いたこの歴史のある自主性主体性のあるこ

の遠野の力を導き出そうと考えてのことです。そのようなときに考えたのが、遠野交易経済圏構想です。藩政時代にはこの地域の中での政治経済文化の中心地であったことをよみがえらせるような街づくりを目指したのです。パンフレットをご覧ください。「生かされた訓練」のなかの、遠野市の沿岸被災地復興支援「縁が結ぶ復興への絆 構想から実践へ」に掲載の遠野市の地図をご覧ください。遠野が沿岸からちょうど真ん中であることがおわかり頂けるかと思えます。遠野からコンパスをひいて頂くと、ちょうど遠野は沿岸より25km、50kmの位置にあります。50kmとはヘリコプターで15分程度の距離にあたり、道路が使用できない場合にも利用しやすい場所になります。国道も4本通っており、これは珍しい地域です。利用者の少なさなどから、道路や電車の誘致はなかなか難しいのですが、産婦人科の不在、助産師など体制を整えるほかに道路整備の必要性を訴えることから、これらを整えてきました。

こうした後方支援中継基地構想をまとめ、津波などが起きた時に遠野として果たすべき役割を考えていました。被災の状況によって助かるべき命を救うために、後方に拠点を設けて情報をまとめられる仕組みを作ることを震災より前の平成19年に提案したのです。当時様々な行政に提案しましたが、反応は思わしくありませんでした。逆に興味を持ってくださったのは、警察や消防・自衛隊、医療関係者の方でした。特に当時の陸上自衛隊東北の宗像総監は興味を持ってくださいました。宗像総監は自らこの構想に参加してくださり、1億円の予算を捻出、「みちのくアラート2008」を開催、18,000人、車両2,300台、ヘリコプター43機参加の大規模な訓練を遠野を拠点として行ってくださいました。大変真剣な実践に則した訓練でした。我々行政は構想をまとめたり、あらかじめ準備することは得意ですが、実際の間ではなかなか役に立たない場面が多いです。遠野市職員が3月11日に比較的スムーズに行くことができたのは、この訓練があったからです。また遠野が平成19年度に当番となって岩手県の震災訓練も行われましたが、この際にも私は強く提案をして津波訓練を行いました。これも実際の震災に経験が生かされました。

被災側からの意見としては、残念ながら国の行政は災害時機能していなかったと言わざるを得ません。災害対策についても、国・県・市町村という縦組織

で成り立っております。被災した自治体が県に要請すると、県は国に要請するのです。今回は被害が大変広域にわたっていたため、そのような縦組織順番の要請がスムーズに行われるような状況ではありませんでした。国と市町村との温度差を感じる経験にもなりました。しかしこの我々の救援活動には約4億円かかりましたが、被災時に急いで準備した救援物資も含めて県と国に補てんして頂きました。

まだまだ被災して辛い思いを持つ方もたくさんいらっしゃいます。このことも被災地域の市長として皆さまに知って頂ければと思います。またお越し頂ければ幸いです。今日は本当にありがとうございました。

東京新橋 RC 小山会員

RCなどで集めた義捐金ですが、上手く遠野にも配布されたのでしょうか。

遠野市長

義捐金については、直接の被災地でないとのことから正式には頂いていなのですが、それでも全国の方々のご厚意を頂き、1億6000万円頂きました。ボランティアの方が80,000人いらしたのですが、遠野の旅館やタクシーの多くは全てマスクミが使用していました。そのような状況の中で1日700-800人いらっしゃるボランティアの方を受け入れたのは、市内にある地区センター・集会場・自治会館・コミュニティーセンターといったところです。設備があるところは全て受け入れ可能にしました。そうした準備にかかる経費やボランティアの方々の移動費用などに使用させて頂きました。ご支援くださった方々からもそうした後方支援の費用として寄付頂いております。検証記録誌の作成にも使用させて頂いておりますが、まだ2,000万円ほど未使用です。



遠野伊藤家にて